

わが国における博物館成立過程の研究  
展示空間の教育的特質

論 文 概 要 書

概要書09.103.docx

福 井 庸 子

## 1. 本研究の目的と趣旨

本論文の目的は、わが国において博物館が成立していく過程を、可能な限り構造的かつ実証的に解明するところにある。具体的には、博物館の成立過程を、構造的に分析していくなかで、近世にみられた展示空間における原初的な教育がどのようなものだったのか、近代化、制度化されるプロセスにおいて、どのような変容を遂げたのかという問いに対する考察を試みている。

こうした目的を設定したのは、わが国の博物館学、とくに博物館教育に関する研究蓄積が非常に少ないことに由来する。現在、日本国内の登録博物館と博物館類似施設を合わせた数は 5500 強に上り、国際的にみても、日本の博物館普及率は圧倒的な高さを誇っている。本来であれば、博物館数の増加と博物館学分野の研究蓄積が比例するところであるが、わが国の博物館学は、諸外国と比較すると立ち遅れている感が否めない。とくに、博物館学、博物館教育の中核となるべきテーマである博物館史については、先行研究でも指摘されているとおり、体系的に論述したものはほとんど見当たらないのが実態である。

本論文はこうしたわが国の博物館研究の現状を踏まえたうえで、わが国における博物館学の構築に向けての第一歩を踏み出そうとするものである。「博物館」という教育機関が、日本国内において、どのような経緯のもとに設立されたのか、そこで目指された教育とは何だったのか、こうした歴史的な問いを明らかにすることは、単に博物館の歴史を解明するにとどまらず、現在の博物館が拠って立つ基盤を明らかにすることも意味する。現在ある博物館教育の意味を根底にまで遡り、それと向き合うこと、これは一見すると遠回りのように見えるが、博物館教育を考えるうえで、避けては通れない手続きであろう。

上記の問題意識から、本論文は企図されたわけだが、具体的には博物館史のなかでも、博物館が成立する過程を検討していく。また、博物館の成立史を分析していくなかで、明治を起点に論じるのではなく、近世における博物館に類似した活動、つまり近世の展示空間を視野に入れて検討を行った。まず、(1) 博物館の成立史を取り上げる理由、つづいて(2) 近世から近代を連続した視点で検討した意図について確認しておきたい。

(1) 博物館史のなかでも、本論文が、博物館の成立する過程について取り上げるのは、収集、保存、展示といった現在の博物館における一連の活動の背景にある意味について、再検討しておく必要性を感じるからである。

博物館も他の教育施設と同様に、1945 年の敗戦を機に教育の民主化のための転換を経験

した。しかし、一方で博物館における一連の教育に関連する手続き、たとえば資料の収集、記録、展示などの諸々の方法については、博物館が成立した 1900 年代初頭のやり方を引き続けているのも事実である。資料の収集や記録、展示といった具体的な諸活動の方法は、これまで、技術的な文脈において議論されることが多く、その手続きの背景にある考え方や、意味については十分に研究されてこなかった。だが、これら無色透明のように思われる博物館の基礎的な一連の手続きが確立していく過程には、それなりの必然性があったはずである。どのような基準で資料を選択するのか、資料を選択するのは誰か、展示を企画する際に何を目的とするのか、そこでの見学者の過ごし方はどのようなものか、こうした一つ一つの問いの背景には、博物館に対する時代の期待があったはずだ。そして、今なお、博物館の基本的な手続きが変わっていないとするならば、博物館が成立した時期の考え方や、現在の博物館のありようが、全くの無関係にあるとは言い切れないだろう。博物館が成立していく過程、すなわち、現在の博物館の基礎が、かたちづくられた当初の博物館に課せられた期待を解明することは、現在の博物館の基盤を問い返すことでもある。

(2) また、本論文が博物館の成立過程を考察するにあたって、近世から近代を視野に入れたのは、明治以降の博物館史の解明をもって、わが国の博物館史とする従来の研究のあり方では、博物館の成立過程を十全に捉えることができない、と考えたためである。

一般的に言って、博物館が成立する過程で言うと、近代以降、西欧の博物館が輸入され、近代日本において確立していく過程が想定される。実際、先行研究の大部分は、明治を起点とした叙述が大部分であり、たとえ近世における展示に類似した活動が取り上げられることがあったとしても、それは博物館が成立する前段階の一つとしての位置づけであり、主眼が明治以降の近代博物館の分析にあることに変わりはない。もしも、わが国の博物館が西欧のミュージアムをそのまま輸入したというのであれば、明治を起点とした分析で問題はないだろう。だが、わが国の博物館は、西欧のミュージアムに範をとりながらも、最終的には日本独自の発展をとげたというのが実態である。その経過にあって、近世において大流行した展示に類似した活動 物産会や見世物、開帳、およびそこでの経験が、明治以降の博物館に影響を与えたことは、容易に想像できる。わが国の博物館成立の過程を正しくとらえようとするならば、単に近代以降の姿だけを追い求めるのではなく、前時代の実態を加えて分析をしていく必要がある。

さらに、先行研究では明治を起点として論じるばかりでなく、明治以降の博物館で志向された教育を、所与のものとして論じる傾向があり、そこでの教育の内容や意味について

は、それほど議論してこなかった。近世における展示に類似した活動と、明治以降の博物館は、どのようなところが共通し異なっているのか、その相違点と共通点を整理することによって、わが国における近代博物館が志向した教育の内容と意味を、より正確に解明することができるかと筆者は考えた。

以上の理由から本論文では、博物館の原初的な形態、すなわち、物を収集し、人々の目に触れるよう、一定の場所に置くという一連の活動が現れた 1750 年代から、社会教育機関として位置付けられ、現在の博物館の原型が確立した 1900 年代初頭までを視野に入れて、わが国の博物館の成立史を検討していくこととした。また、その際に、近世にみられた展示空間における教育的性格を明らかにするとともに、これが明治以降にどのような変容を遂げたのか、また、どのような新たな教育的性格が付与されたのか、その解明を試みている。こうした手法によることで、博物館の成立過程を構造的に、かつ実証的にあきらかにしようとしている。

なお、近世から近代までの博物館の成立過程をとらえるために、本論文では「展示空間」という術語を使用することにした。当然のことながら、従来の研究のように、物を収集、保存し、これを展示する「施設」を博物館としてとらえた場合、近世社会に「博物館」なる施設は存在しなかったのだから、近世を分析の対象とすることは不可能である。そこで本論文では、近世から近代までの博物館に関連した一連の動きをとらえるために「展示空間」という考え方を導入した。ここでいう展示空間とは、単に「展示」のみを指すのではなく、設置された場所の特徴や、具体的な展示資料および配列、空間がもたらす雰囲気、見学者の受け止め方をも含んだ活動的な空間のことである。このように、研究の視点を、展示空間として規定することによって、近世と近代を一つの線上で検討することが可能となり、さらに、資料の収集や選択、展示等の一連のプロセスの実態、その背景にある考え方も分析することができた。

以上、本論文では近世と近代を視野に入れて、わが国の博物館の成立過程を分析するわけだが、分析にあたって次の三つの課題に取り組んでいる。

第一は、近世の展示空間にみられる教育的な営為の解明である。前に述べように、わが国では、1750 年代より物産会や見世物、開帳といった博物館に類似した活動が広く展開していた。これらは、展示を目的とした常設の施設こそないものの、物を収集し、一定の場所に置くことで人々の目に触れさせるという点においては、現代の博物館活動と共通している。と同時に、近世の展示空間では、物を収集、展示し、そこに集まった人々が議論し、

関わりあうという一連のプロセスに、きわめて教育的な性格が見出された。具体的に言えば、近世の展示空間の場合、物の価値や意味は、出品者や見学者らの議論によって決定していたのであり、価値の生成に一般の人々が積極的にかかわっていたのである。つまり、近世における展示空間とは、ある特定の価値観や考えを特権化し、それを中心に組み立てるような場としてではなく、むしろ、こうした既成の考えから距離を置きつつ、生活のなかで湧出する疑問や思いと結びつけながら、自分なりの見方を形成していく場であったといえる。本論文では、こうした近世における展示空間の教育的な営為について分析をおこなった。とくに、先行研究では、ほとんど顧みられてこなかった見世物や開帳といった民衆によって創出された展示空間についても、分析の対象としている点は、本論文の特徴でもある。

第二は、明治以降の博物館が志向した教育の内容、意味の解明にある。明治以降、博物館の創設の過程において、上記で見たような近世の展示空間に確認された教育的な営為は次第に姿を消し、これに代わる新たな教育的な性格が付与されていくことになる。ここで注意すべきなのは、近世の展示空間に見られた教育的性格と、近代以降に志向された教育が異質なものであったという点である。たとえば、明治以降の展示空間では、展示品の価値は事前に確定していたため、見学者は物の価値を論じるのではなく、物を観察することによって、その価値や意味を正しく読み取ることを求められるようになった。結果的に、物と人との関係が密接に保たれた近世と比較すると、観覧者にとって展示品は疎遠になるものの、そのことがかえって物を観察するという行為を促すようになったが、一方で、近世に見られたような、物の価値や意味を検討するための議論はなくなっていく。本論文では、明治以降の博物館が志向した教育の性格を、つづさに分析するなかで、現代の博物館が拠って立つ教育的基盤をあらためて問い返していくことにする。

なお、上記の2点を分析していく過程で、物産会や博物館などに関連した引き札や案内状、広告など、広く一次資料を扱うことになった。とくに1860年代から1880年頃までの田中芳男文庫の資料の数々は、「空白の時代」と呼ばれる明治一桁代を補う貴重な資料であったことを付記しておく。

第三は、博物館が成立していく過程を、社会的背景や時代的思潮が複雑に交錯しあう時代相を含めて検討していこうとしたところがあげられる。博物館は、病院や図書館といった施設と異なり、設立の当初より、現在で言うところの「博物館」としての確固とした地位をもって登場したわけではない。むしろ諸外国との緊張関係や政治的状況はもちろんの

こと、本草学から博物学への系譜に見られる自然や社会に対峙する際のものの考え方の変化や、近世より続く娯楽的展示空間や都市部の町人をはじめとした人々の余暇の過ごし方などとも密接な関係を保ちながら、徐々に博物館としての体をなしていった施設である。したがって、もしも博物館が成立する過程を真に解明しようとするならば、博物館の成立をうながした思想的源泉、社会的背景などを含めて考察する必要があると考えた。

このように、本論文では、博物館の成立過程を近世と近代を連続する視点を持ち、かつ博物館の成立に関連した社会的、政治的背景なども視野に入れて論述することを試みた。

## 2. 先行研究と本研究の位置づけ

これまで、わが国における博物館の成立過程に関する研究は、博物館学や社会教育学、それ以外の人文、社会諸科学 - 政治思想史や文化資源学など の領域から取り組まれてきた。このように研究が多領域にわたっているのは、博物館が単に社会教育の必要性からだけでなく、近代化の過程において、外交や社会政策といった問題との関連のなかで設立が希求されたことによる。こうした各領域における博物館の成立過程に関する研究は、1990年代より徐々に蓄積を増してきた。先行研究の傾向をまとめると以下の2点となる。

一点目の傾向は、明治をわが国における博物館成立の起点としている点である。もちろん、明治以降、西欧より輸入された博物館が、短期間に民衆に受容された要因として、1750年代以降に一世を風靡した物産会や見世物、開帳の経験を挙げている研究も存在している。しかし先行研究の大部分は、近世の展示空間、およびそれを支えた理念については、十分に解明しないまま、「連続性」という言葉だけで語ってきた。展示という取り組み自体は、一見、似ていても、近世と近代の展示空間の思想的な背景や、物の見方、見学者の過ごし方などは大きく異なっている。明治以降の博物館が、近世における展示空間、およびその背景にある思想を、どのように受け継ぎ、また変容させたのかを比較、検討せずに、日本の近代博物館が目指した教育について説得力をもって語ることはできないだろう。

先行研究の特徴の二点目として、分析の対象が、博物館の設立や博覧会の開催に関係した特定の人物、もしくは特定の博覧会、展覧会の分析に偏っている点があげられる。すなわち、個々の実態が解明され、それぞれの文脈における博物館教育については触れられているものの、日本の博物館の成立を貫く教育の軸がどこにあるのかについては、いまだ十分に明らかになっていないのである。

本論文では、上記にみたような研究動向を踏まえて、博物館の原初的な形態、すなわち、物を収集し、人々の目に触れるよう、一定の場所に置くという一連の活動が現れた 1750 年代から、社会教育機関として位置付けられ、現在の博物館の原型が確立した 1900 年代初頭までを視野に入れて、わが国の博物館の成立史を検討していくこととした。部分的解明にとどまる、わが国の博物館史研究において本論文の取り組みは唯一のものと言える。

### 3．本論文の構成

本論文は近世から近代を連続する視点をもって論述している。本論文が研究対象とした時期は、1750 年代から 1900 年代初頭であるが、この間にわが国の博物館は 4 つの転換を経験した。本論文の章の構成はこれに対応していることから、以下でその経過を確認する。

第一の転換期は、物産会が勃興した 1750 年代であり、本論文では第一章、第二章がこれに相当する。物産会の勃興という歴史的事実のみならず、本論文ではその背景にある思想的側面、すなわち既成の世界観に拮抗しようとする思想的な動きがあったことに着目をしている。

第二は、日本人がはじめて西欧の博覧会や博物館を見聞し、その仕組みや思想を理解しようとした 1850 年代から 1869 年代が該当し、第三章でその詳細を論述している。

第三の転換期は 1870 年代から 1890 年代であり、第四章、第五章で取り上げている。明治の幕開けとともに、庶民を中心に展開されてきた展示空間は、国家によって掌握されるようになり、その性格も本質的な変化を遂げることになる。第四章、第五章では、近世の展示空間と比較しながら、あらたに付与された教育の内実を社会状況や展示空間の実際から検討した。

第四は、博物館が社会教育機関として位置付けられた 1900 年代初頭である。この時期に現在の博物館の基礎はほぼ形づくられたといってよい。第六章において社会教育行政に編入された要因や、そこで議論された教育論、および展示空間の状況を取り上げ明らかにしている。各章の論述にあたっては、社会的な動向や思想的な背景を把握ののちに具体的な展示空間の分析という手順を踏んでいる。

こうした構成を採用したのは、わが国における博物館の成立過程を構造的にみるために、近世における展示空間の内実を明らかにしておく必要があったことによる。また、近世に隆盛した展示空間の思想および実態を把握したうえで、近代以降の博物館を考察するとい

う順序が最も、明治以降の博物館教育を検討するうえで適していたことによる。

なお、目次は以下のとおりとなっている。

## 目次

### 序論

1. 本研究の課題
2. 展示空間の位置づけ
3. 本研究の意義
4. 先行研究と本研究の位置
5. 本研究の構成

### 本論

#### 第一章 開かれた語りの場としての物産会 物産会の開催とその思想的背景

- 第一節 本草学の転換 名物学的方法から実証的方法へ
- 第二節 物産会の開催とその思想
- 第三節 物産会を支える知のネットワーク

#### 第二章 聖・俗としての展示空間

- 第一節 近世における展示空間の特質
- 第二節 開帳・出開帳の展示空間の実際
- 第三節 見世物の展示空間の実際
- 第四節 物産会の展示空間の実際
- 第五節 抵抗の場としての展示空間

#### 第三章 西欧博物館・博覧会の経験 - 1850 年代から 60 年代を中心に

- 第一節 近世における展示空間の認識 「博物」の語源と近世における意味
- 第二節 自然と人事の分化 西洋博物学の移入
- 第三節 幕末における海外使節団の博物館・博覧会の見聞

#### 第四章 近代博物館の始動 - 展示空間の祝祭から嚮動へ -

##### 第一節 町田久成と田中芳男の博物館像

##### 第二節 規格化された展示活動 文部省主催博覧会の開催

##### 第三節 博物館・博覧会と国内産業の充実 - 内国勸業博覧会の開催

##### 第四節 博物館と博覧会の分化

#### 第五章 博覧会における展示空間の秩序化と民衆の受容

##### 第一節 近世的展示空間と近代的展示空間のあいだ

##### 第二節 近代的展示空間の創出

##### 第三節 展示空間における娯楽と教育の齟齬

#### 第六章 社会教育機関としての博物館の誕生

##### 第一節 棚橋源太郎の博物館教育観

##### 第二節 娯楽の質的变化と博物館の社会教育行政への編入

##### 第三節 社会教育機関としての博物館の誕生 東京教育博物館における教育実践 -

##### 第四節 博物館における教育とは何か

学芸員の専門性をめぐる議論のなかでの問い

#### 結論

#### 4 . 各章の概要

続けて本論文における各章の概要について示す。

##### ・第一章 開かれた語りの場としての物産会 物産会の開催とその思想的背景

本章では、近世における展示空間の勃興の背景となる思想的側面について検討している。具体的には、貝原益軒や平賀源内といった本草学者や、物産会を開催した人物の自然に対する認識、物の見方を分析した。その結果、(1)1700年代から1750年代にかけて、物産会開催の中心的役割をおった本草学者たちを中心に、自然に対する認識のあり方が変化していること、(2)物産会が出品者と見学者が自由に物の価値を語り合う教育的な空間であったこと、(3)物産会のほかに、全国各地で物について学び、語り合う学習の場が展開されていること、

たこと、以上、三点が明らかとなった。以下では、それぞれの要旨を簡単にまとめる。

#### (1) 1700年代から1750年代における本草学の転換

1750年代以前において本草学を研究すること、言いかえるならば自然を研究する動機は、朱子学で言うところの「仁政」を肯定するところにあったと言える。朱子学の考え方によると、世界の動植物は一定の秩序のもとに構成されており、それぞれの生物さらに、父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友にいたるまで、生まれながらの職分を果たすよう予め決定づけられている。この秩序を把握し、みずからのあるべき行動を正すところ、つまり当時の政治原理であった朱子学の考え方を理解するところに、自然を研究する意味があった。こうした考え方は貝原益軒に代表され、本章でも詳細を検討してきた。

しかし、1700年代半ばにかけて、本草学者たちの自然にむけるまなざしは徐々に変化しはじめる。すなわち、自然と倫理を引き離して考えるようになったのである。平賀源内をはじめとした本草学者、および本草学に関わりをもった人々は、正しいとされる秩序に基づいて自然や事物を理解するのではなく、自然や事物をありのままに観察、研究することで、人間と、人間を取り巻く世界を、自分なりの文脈で理解しようとした。つまりこの時期の本草学者、および物産会の関係者たちは、既成の秩序をただ受容するのではなく、自分なりに自然や歴史の認識を深め、また世界観を構築しようとしたのである。そして、こうした過程において、彼らの重要な学習の場となったのが、物産会という展示空間だった。

#### (2) 物産会における取り組みの教育性

上記に見られる本草学者たちの自然認識の変化は、物産会を勃興する直接的な契機となった。本章では物産会の趣旨や、物の収集方法、具体的な収集品の内容を丁寧に分析した。その結果、物産会への出品は、老若男女を問わず誰でも可能であったこと、物の価値や意味を議論によって決定していたことが明らかとなった。実際、物産会には全国各地から社会階層を問わず多様な出品者があった。展示品も、真贋に関係なく自然物から人工品までを含む多岐にわたった内容となっている。いわば、物産会という空間は、秩序や筋道を提示することを志向するのではなく、物の見方、理解の仕方について、それぞれに議論をたかかわせ、多様な見方を許容し、また学ぶ場であったと言える。そしてこの点が物産会という展示空間を本草学者たちが必要とした要因であった。

#### (3) 物産会を支える知のネットワークの存在

本章をとおして明らかとなった点の第三は、本草学者以外にも多種多様な人々が物産会に関係を持っていたこと、さらに全国にそうした人々の学びの場が展開されていた点であ

る。物産会に多様な背景を持つ人々が引き寄せられていた理由として、物産会の特殊性があげられる。物産会、および物産会に関連した活動は、客観的な事実の解明を第一義とするのではなく、一人ひとりの関心や思いと、物とを関連づけて議論するところに重点が置かれていた。事実、物産会に関連した一連の活動を検討すると、物に関連する伝説や風習など客観性とは程遠い事項、しかし歴史的に脈々と息づいてきた民衆の思いまでも研究の対象としている場合が少なくない。つまり、近世に展開された物産会とは、既成の筋道、または正確な知識を持って物事を理解する場ではなく、個々の関心と理解に基づいて討論する場であったと言える。それゆえに、自分が日常のなかで感じている素朴な疑問や思いを、物を介して語り合う場として、専門的な知識を持たない一般の人々の間に、物産会は受け入れられたのである。

## ・第二章 聖・俗としての展示空間

本章では、近世における展示空間の実際を取り上げた。第一章で確認した思想性は、どのような形で展示空間に反映されたのか、展示会場が設営された場所の特徴、具体的な展示品や動線、見学者の反応を含めて論じている。また民衆にとっての展示空間の意味についても言及した。なお、本章では、物産会に加えて、見世物や開帳も検討の対象としている。見世物や開帳を対象としたのは、これらの内容が、必ずしも現在、考えられているような奇術や軽業ばかりでなく、動物、植物、鉱物の展示や、最新機械の紹介なども含んでおり、物産会と類似していたためである。

本章で明らかになったことは、近世における展示空間が、日常生活のなかで去来する思いや願いを託す場であったこと、日常生活のなかで、あらゆる行動を規制する制度、もしくは権威などを哄笑のうちに、その高みから引きずり下ろそうとする意思を持った場であったという点である。

物産会が、日々のなかで想起される疑問や、思いを表出する場であったことは、すでに述べた。同様に、見世物や開帳も、日々の生活実感と密接に結びついた場であった。苦しい生活からの脱出を願う思いと、現在の社会のあり方への不満は、表裏一体の関係にある。近世の展示空間とは、こうした民衆の複雑な思いが表現される条件、つまり祝祭的な性格を兼ね備えていた。日常生活のなかで、人々は果たすべき職務や役割を担っており、その行動は規定されている。こうした日常の枠組みをはみ出す場、つまり、身分や役割を超越した祝祭的な空間を、近世の展示空間は有していたのである。事実、見世物や開帳は、寺

社の境内やその周辺など、いわゆる聖と俗が交差する場所に立地していたし、物産会も、土農工商、老若男女に関係なく、人々が一堂に会する雑多な空間が構成され、展示内容も虚、実が入り乱れたものであった。こうした祝祭性によって、展示空間は身分制度や既成の価値観を取り払った場として機能するようになる。そして、そうした場であったからこそ、人々は日常のなかで湧出する思いや考えを忌憚なく表明できたのだった。

以上、第一章、第二章では、近世における展示空間とその思想を検討してきた。ここで確認できるのは、明治以降に確立した展示空間には見られない教育的な性格である。近世における展示空間において、一つの統一された全体像が提示されることは決してなかった。明治以降に確立された博物館は、現実のなかに隠された、もしくは見えにくい意図や事実を、より分かりやすく視覚的に訴えるのが常である。しかし近世における展示空間は、あらかじめ規定された方向性を持たない。真偽が入り混じる無秩序な世界のただなかにあるのである。見学者は、この視界の前に立ち尽くし、言葉にならない混乱を覚える。しかしこうした働きによって、見学者は、さまざまな事象を分解し、再び主体的に組み立てることができた。そしてこの点にこそ、近世における展示空間の教育性があると考えられる。

### ・第三章 西欧博物館・博覧会の経験 - 1850 年代から 60 年代を中心に

本章では 1850 年代から 1860 年代における西欧博物館、博覧会の見聞とその理解の諸相に焦点をあてている。1860 年代以降、日本人ははじめて西欧の博物館、博覧会を見聞した。このとき海外に派遣された使節団員たちは、単に博物館や博覧会という場を見聞きしただけでなく、その背景にある物の見方、たとえば分類体系に基づく博物学の思想や、物産学の考え方を理解していくことになる。そして、こうした考え方は、のちにわが国の近代博物館の成立の基礎となった。本章では、(1) 博物学の受容過程、(2) 海外使節団の西欧博物館、博覧会の見聞とその理解について検討している。

(1) まず、確認したのは、西洋の博物学が、どのように日本において、紹介され、受容されたのかという点である。博物学とは、元来、動物、植物、鉱物について、その種類、性質、産状などを調査記載する学問であったが、19 世紀において、スウェーデンの博物学者、リンネ (Carl von Linne) によって、生物分類学の手法 ある規則に従って並び替えをするという分類の考え方、および、人間の歴史や生活感情と自然を分離して、あくまで客観的な事実として自然を把握していこうとする学問的な姿勢 が確立された。19 世紀半ばに、日本に輸入されたのは、この近代的な体系に基づいた博物学の考え方である。西

洋博物学の輸入は、物と生活感情を密接に結びつけて考える傾向の強い日本人に大きな衝撃を与えた。とくに、生活感情と物を結びつけることで、人々の多様な語りを引き出していた近世における展示空間に与えた影響は小さくなかった。展示空間が西洋博物学の考え方に則った内容に変化するのには明治以降であったが、近世と明治以降の展示空間の変容の素地は、この頃に徐々につくられていったのである。

(2) つづけて、1860年代に派遣された海外使節団の欧米博物館、博覧会の見聞について検討した。1860年代、幕府および薩摩藩は、矢継ぎ早に計5回の海外使節団を欧米に派遣している。そこで日本人ははじめて欧米の博覧会や博物館を見聞することになるわけだが、ここではじめて体験した展示空間と、彼らが親しんできた展示空間 物産会や見世物、開帳 の間には、著しい違いが存在していた。その違いは次の2点にまとめられる。

第一は空間構成そのものの相違である。近世において展示のために用意された建築物は、寺社前や空地に作られた仮小屋などで、簡素なつくりのものが大部分であったのに対し、欧米の博物館や博覧会場の大部分は、その目的のために建築された荘厳な建物であった。こうした相違点は、双方の目的の違いから生じている。物産会や見世物、開帳といった展示空間は、すでに述べたように、物の価値を含めて議論すること、または既成の権威や秩序などを哄笑するところにその目的があった。したがって建物も空間内部についても、荘厳な雰囲気を作り出す必要はない。しかし欧米の博物館や博覧会は、自国の先進性を他国に伝えるという重要な国家任務を負っていたために、簡素な建物で良いわけがなかった。国家の威信を自ずと感ぜられる装いを施す必要があったのである。

第二の相違点は、物の見方にある。近世における展示空間には物の真偽、価値、意味を議論のなかで決定していこうとする営みがあった。しかし、西欧の博物館、博覧会場の物は、物がそれぞれに所有している個性や雰囲気、歴史性などは取り除かれ、すべてが均質な空間に並べられる。したがって、物の新しさや美しさなど、一目で判断できる特質だけが展示会場では浮き彫りとなる。物の価値をはかるのに、もはや議論は必要ない。西欧の展示空間では、相対的な評価が、絶対的な意味を持っていたのである。こうした展示空間の相違点を当初、嫌悪感をもって眺めていた日本人たちも、その目的、つまり物の優劣を一目で理解することが、富国の第一歩であるということを理解するにつれて、その方法や考え方を急速に受容していくようになる。そしてこの間の理解が、明治以降の博物館設立の基盤となっていくことになる。

#### ・第四章 近代博物館の始動 - 展示空間の祝祭から嚮動へ -

本章では、物産会や見世物、開帳といった展示空間が次第に、博物館、博覧会に変化していく過程を、明治期の社会情勢や思想的側面から跡付けた。

博物館や博覧会は、その時々的情勢にあって国家が直面した緊急課題の解決策として期待され、国家主導で整備が進められてきたわけだが、常に共通していたのは、民衆の自主の精神を涵養するのに博物館や博覧会が適しているという認識だった。政府の博物館、博覧会へのこうした理解から推測できるように、明治以降の博物館や博覧会は、近世における展示空間の否定の上にかたちづくられることになる。とくに既成の価値観やものの見方、秩序などに問いを投げかける近世における展示空間の特質は、どうしても否定する必要があった。したがって明治以降に確立された博物館や博覧会では、近世の展示空間に認められた自由な発想の回路は閉ざされ、一つの道筋に従うように企図されるようになる。結果的に、近世において誰もが出品できた展示品は、主催者によって、厳密に展示にふさわしいか否かを精査されるようになった。というのも、見学者が展示をとおして理解すべき事柄は、事前に決定していたからである。以上のような状況のもと、展示空間は次第に、嚮動としての色合いを強くしていったのだった。

#### ・第五章 博覧会における展示空間の秩序化と民衆の受容

本章では、第四章を踏まえたうえで、明治期における展示空間の実際と民衆の受容について、文部省主催博覧会や内国勸業博覧会を取り上げながら検討した。その結果、明治期の展示空間が、近世以来の娯楽性を保持しながらも、国家の緊急課題に対応するという役割を担いながら展開されたこと、結果的に、自由な議論の空間であった展示空間は、次第に秩序だった空間へと変容したことが明らかとなった。

第四章で確認したように、明治以降に確立された博物館や博覧会では、観覧者が展示をとおして理解すべき点が、前もって政府や博物館関係者によって決定されていた。したがって、博物館や博覧会の主催者は、観覧者が展示を正しく理解できるように、出品物の収集や展示の動線、展示会場の雰囲気など、多方面にわたって、細心の注意を払わなければならなかった。

と同時に、民衆が自ら進んで展示会場に足を運ぶよう、娯楽的な側面にも配慮する必要があった。展示会場には、名古屋城の鯨や最新の噴水など、人の関心をひく仕掛けが多数用意されていたのも、明治以降に確立された博物館や博覧会の特徴である。こうした博物

館主催者の努力の甲斐もあり、見学者たちは、次第に近世における展示空間とは全く異なる物の見方をするようになる。すなわち展示品の価値や意味を、自分自身を基準にはかるのではなく、これを国家が提供する「恩恵」物として理解するようになったのである。展示空間とは、もはや見学者にとって自由な語らいの場、語らいをとおして価値や意味を自らが作り上げていく場ではなくなった。すでに完成した観念を受容する場へと変容したのである。

## 第六章 社会教育機関としての博物館の誕生

本章では、1900 年代初頭すなわち社会教育機関として博物館が位置付けられるまでを取り上げた。具体的には博物館が社会教育機関として注目されるにいたった要因、棚橋源太郎の博物館教育観、および博物館教育をめぐる学芸員の議論について考察した。

1900 年代初頭、次第に娯楽的な色彩を強め、教育性が希薄になってきた博覧会に代わって、博物館に再び注目が集まるようになる。博物館が社会教育機関として位置づいた要因は、偏に国民教化のための機関としての政府の期待にあった。明治末期から大正期にかけて階層分化が広がり、国民の思想問題が重要案件となっていたのである。

こうした理由から博物館は、民衆を教化する優れた機関として、正式に社会教育機関となるわけだが、その過程に全く教育に関する議論がなかったわけでない。とくに東京教育博物館館長でのちに博物館法制定にも関わる棚橋源太郎は、博物館教育について多くの発言をしている。棚橋の教育論は、見学者が学問の方法を身につけることによって、様々な問題を自ら解決できるようになるところに最終的な目標を設定していた。これは、一方的な教授が主流であった当時の教育にあって斬新ではあったが、しかし、見学者はここでも学問体系という、自分の外部にある考え方のルールを習得せねばならなかったのである。科学的な物の考え方や方法を学び、その物差しをもって物を観察し研究すること、これが棚橋の目指した博物館教育であった。

社会教育機関として博物館が正式に位置付けられた 1900 年代初頭は、展示手法や学芸員制度をはじめ現在の博物館の基礎がかたちづくられた時期である。しかし、時代の要請にこたえ続けてきた博物館は、ついに「博物館とは何を教育する機関か」という問いに真正面から取り組まない状態のままで、「社会教育機関」として制度化されたのだった。

## 5．結論と今後の課題

本論文では、第一章から第三章にかけて、近世の展示空間の様相を、第四章から第六章は明治以降の展示空間が「博物館」として確立していく過程、また博物館が「社会教育機関」として位置づくまでの経過を検討してきた。

全体をとおして明らかになったことは、近世における展示空間の教育性を真っ向から否定する思想のもとに、わが国の博物館が成立したという事実である。もちろん、先行研究がその歴史的な連続性を指摘してきたように、近世と明治以降の展示空間の両者の間に、まったく共通項がないわけではない。とくに娯楽という側面から見ると両者は非常に類似しているかのように見える。しかし注意すべきは、娯楽の質の問題であり、娯楽と展示空間が結合する、その要因についてである。

すでに述べたように、近世における展示空間は、一つの統一した全体像 社会秩序や学問的体系 の提示を拒否し、既成の価値観や考え方から距離を置いて、出品者、観覧者みずからが、主体的に考え方を組み立てていこうとする営為を企図していた。と同時に、それぞれの発見や思いを仲間と分かち合い、討論するところに展示空間の楽しみがあった。しかし、こうした自由な言論空間の存在を可能にするには、一定の条件を満たす必要がある。立場や地位、役職に課せられた規範意識や振る舞いなどが絡まりあう日常性から個人を解放させる空間、つまり祝祭性を帯びた空間が必要とされたのだった。実際、近世の展示空間が聖と俗、虚と実が交錯する場だったことは確認してきた。

たいして、明治以降の展示空間において企図された娯楽は、文字どおり、人の心を楽しませ、慰めるためのもので、政府によって民衆を惹きつける方策として採用された手段にすぎない。もはや秩序や規範を問い返そうとするダイナミックな動きは失われ、近世における展示空間に見出せた教育的な性格は、変容を余儀なくされた。娯乐的な側面は、一見すると近世と明治以降の展示空間の類似点であるが、この現象の背景にある志向性の懸隔は決して小さくない。そして、この相違こそが本論文がもっとも注意を払った点でもある。

しかし、こうしたわが国の近代博物館の特質は、過去の問題とばかりは言えないだろう。明治以降に創出された博物館の性格から、現在の博物館も完全に自由にはなっていないのである。もちろん、近年において、これまで博物館が継承してきた手法とは異なる教育のあり方が模索されはじめている。しかし依然として、多くの博物館が、既成の知を提示するという明治以降からの手法を堅持しているのも事実である。

本論文の試みは、近世の展示空間にみられる教育的な性格を明らかにし、こうした教育的な性格が、明治以降、博物館が確立されていく過程でどのような変化を遂げたのかを明らかにすることをとおして、再び展示空間の教育性を問い直すことであった。これまで見てきたとおり、展示空間の教育には、歴史的にみて全く方向性の異なる二つの特質がある。第一は、物を集め、展示し、物の背景にあるあらゆる思いや経験を観覧者と議論していかうとするもので、物と物、物と人、人と人との間に新しい関係を築いていかうとする試みである。第二は物を展示することをとおして、正確な物事の理解へと人々を導いていかうとする試みである。現在、私たちは展示空間の教育的な意味を再び問い直す時期をむかえているわけだが、博物館教育の根拠を明らかにし、そのうえで、あらためて今後の教育のあり方を検討していかうとすると、近世の展示空間に見られた教育的な特質 それは一つの正解を導きだそうとするのではなく、議論のなかで模索していかうとする試み は、現代の博物館に重要な視点を提示すると考えられる。

今後の課題は、1700 年から 1750 年代にかけて確認できた本草学の学問的な転換、および物産会を支える自然認識の変化が起こった背景を検討していくことである。この時期に、こうした変化が見られた背景には、資本主義経済の勃興と浸透といった経済的側面の転換があったのではないだろうか。また朱子学による統治体制と経済との関係も無視できない。本論文中では、展示空間の変容に焦点を絞ったために、こうした問題を十分に解明できなかった。したがって、近世における経済の発展および政治体制を含めて、近世の展示空間とその思想を、さらに考察していくことが本論文の課題であり、また今後の研究の課題でもある。